



文化庁平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業

文化庁

フランチャイズ・オーケストラによる 地域共生社会実現を目指した 「音楽パートナーシップ」整備構築事業

報 告



TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA

Jonathan Nott, *Music Director*

公益財団法人 東京交響楽団

事業概要・主旨

文化庁平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業 フランチャイズ・オーケストラによる 地域共生社会実現を目指した 「音楽パートナーシップ」整備構築事業

平成29年度同事業において川崎市内での調査研究及び「ファンタスティック・オーケストラ～みんなで集えるコンサート」を実施した。

演劇・ミュージカルなどの舞台芸術と比較すると、クラシック音楽の分野では、未だ障害者を含めた多様な聴衆の受け入れには、多くの課題があることを改めて認識することとなった。

クラシック音楽、オーケストラコンサート鑑賞を通して、障害者など多様な聴衆を受け入れる鑑賞環境を拡充しつつ「地域共生社会」実現の一助となることを目指す本取り組みでは前年度の同事業を通じて、以下5つの課題に取り組むこととした。

- ① 鑑賞サポート・メニューの少なさ。またサービスが本当にニーズに応えた内容となっているか。**
→前年のサポート内容・利用状況の検証を行った。参加しやすい時間帯、プログラムの長さや内容も含め、当事者団体や、福祉施設職員、鑑賞支援に取り組む事業者への聞き取り調査を行った。事後のフィードバックを充実したものとするため、座談会形式で有識者との意見交換会を設けた。
- ② 鑑賞サポート・サービスの利用者が少ないため、そこに予算、マンパワーを充てるのが難しい。**
→同事業において継続的に公演を行うことで、必要な業務の省力化(このような演奏会のマニュアル化、ノウハウ蓄積)を目指した。楽団内において、社会情勢を鑑み必要性への理解を促すとともに、趣旨に賛同する外部事業者と協働することでマンパワーを補填する。
- ③ 鑑賞サポート・サービスの利用対象者へ、適切に情報が届きにくく、認知度が低かった。**
→関連諸団体((公財)川崎市身体障害者協会、(公財)川崎市老人クラブ連合会、(社福)川崎市社会福祉協議会)の後援を得るとともに、具体的な告知や情報アクセスのための協力を仰ぐ。シアター・アクセシビリティ・ネットワークや視覚ネットなどの既存のポータルサイトも利用する。
- ④ 障害者を過度に優遇することで、人々の間に分断が生まれ、相互理解や受容の妨げになっている。**
→オーケストラコンサートを通じて、障害者と共に大人も子どもも多様な人々が同時に参加できる環境を整え、同じ聴衆として相互理解や受容を促すことで、共生社会の実現を促進する。
- ⑤ 「障害者は無料」という催事が多い中で、文化芸術への参加に対価を払う気運が生まれにくい。十分な有料来場者数が確保できない場合、鑑賞サポート・サービスを拡充しても、継続的に事業を行うことが困難。**

→障害者を特別扱いすることなく、経済的にハンデを持っている人と同様に手頃な価格のチケット料金を設定し、チケットを買って来るという気運を高める。

川崎市フランチャイズ・オーケストラとして、地域の共生社会実現のため、行政並びに拠点ホール等地域との連携を深め、障害者・高齢者・子育て中の保護者・青少年など多様な人々が集えるよう、各種バリアフリーサポートを充実させることで新しいニーズを掘り起こしていく。また地域の障害者・福祉団体とのネットワーク構築(音楽パートナーシップ)を進め「クラシック音楽界のバリアフリー化」の先進的な取り組みを目指していくものである。

蓄積されたノウハウはクラシック音楽業界で共有し、また広く文化芸術団体のモデルケースとなることも目指し、5カ年計画の1年目をスタートさせた。

1年目

ミュージアム川崎シンフォニーホールと連携し、障害者・高齢者・青少年等を対象とした、充実したバリアフリーサポートのあるオーケストラコンサート機会の提供を中心に、アウトリーチ事業と連動する形で団体及び市民ネットワークを整備構築する。

2年目

同ホールとの連携を深化させながら、より求められるバリアフリーサポートを充実させ、音楽大学・教育機関と連携したオーケストラコンサートを提供。市内広範囲での鑑賞機会を充実させ、ネットワークの拡充も図る。

3年目

同ホールとの連携を更に深化させながら、他の芸術団体・音楽大学等との連携を拡大しつつ、継続的な鑑賞機会を創出し、オーケストラメンバーによる芸術活動へのサポート、オーケストラ公演と他芸術との相乗表現機会を設ける。

4年目

3年目までの取り組みを継承しつつ、同ホールとオーケストラによる、過去実績を踏まえた継続性のある新たな芸術文化活動を模索する。主催者へ向けた「バリアフリー・コンサートマニュアル」の作成、シンポジウムを実施。

5年目

同ホールとオーケストラによる定期的な公演の実施を目指す。シンポジウムを通じ、川崎市の街づくり担当、文化振興担当、福祉担当と共に、共生社会の実現を目指した芸術文化振興施策の連携強化を促進。以て地域での「音楽パートナーシップ」を全うする。

目次

■事業概要・主旨	3
■アウトリーチ活動	4
■ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～	7
アンケート結果	10
フィードバック座談会(演奏会評価を中心に)	11
■展 望	15

アウトリーチ活動

公益財団法人東京交響楽団 フランチャイズ事業本部 桐原美砂

「みんなで集えるコンサート ミニ」(全4回)記録

昨年度に引き続き、コンサート会場に出かけることが困難な方への、東京交響楽団メンバーによるアンサンブルコンサートと、VR(ヴァーチャル・リアリティ)映像等を利用したオーケストラ体験を合わせたワークショップを川崎市内障害者福祉施設にて4回実施。

VR映像を使うことにより、広い会場、大勢の人数による演奏など、ハンディキャップの方が感じるかもしれない未知への不安やおそれを取り除き、同年10月の「ファンタスティック・オーケストラ～みんなで集えるコンサート」やオーケストラへの興味関心の喚起と演奏会への導入を図るものとして実施した。

概要

様々な曲目に対応しやすく、オーケストラの最小単位である弦楽四重奏で編成。4ヶ所全て同じメンバーで赴いた。演奏メンバーには施設により、障害のタイプや雰囲気異なること、突発的な動きや声が上がることがある点、いずれの施設もオーケストラメンバーの来訪をとってもとても楽しみにしていることを伝えた。

メンバー自身が登場の演出や司会にも工夫をこらし、生の演奏の楽しさやオーケストラ・コンサートへの予感を感じさせるようなプログラムを構成。本格的なアンサンブル曲から、演奏メンバーの人となりも伝わる温かいコンサートとなった。

工夫した点

①初めて聴く曲、知らない曲を楽しめるか

→演奏するだけでなく、会場内を歩きながら演奏し、間近で弾いている姿をみてもらう等の身近に感じられる演出を盛り込んだ。また会場の立地に応じて、親しみが持てるタイトルの曲を演奏。リクエスト曲や、参加者に人気の高いディズニーランドへ

行ったつもりになるよう、英語のMCによる前振りを取り入れるなど、参加者の好きなものに寄り添う選曲を心がけた。

②オーケストラによるクラシック・コンサートへの導入につなげる為の選曲をどうするか

→持ち味であるクラシック作品を演奏するにあたり、同じ作曲家の作品や、趣旨の似ている曲を演奏することで、オーケストラ・コンサートへの期待感を高める。知られていない作品でも楽しめるよう、曲調にメリハリがあり、リズムの特徴的な選曲をした。

③演奏者が、聴衆が楽しんでいるか、快適と感じているか等の状態を適切に感知できるか。

→同メンバーで行うことで、回を重ねるたびに柔軟性が生まれた。近い距離ならではの親密な雰囲気の中で、次第に参加者と目が合う、笑顔が交錯する場面がより多く見られた。

●プログラムの一例

- モンティ：チャルダッシュ
- アンダーソン：舞踏会の美女
- 久石譲：海の見える街
- ディズニーメドレー
- ボロディン：弦楽四重奏曲第2番より第3楽章
- グラスノフ：5つのノヴェレットよりオリエント
- 坂本九：見上げてごらん夜の星を～上を向いて歩こう
- サウンド・オブ・ミュージック・メドレー
- アンコール：サザエさんのテーマ

日時・会場

- ①かわさき障害者福祉施設 たじま
(社会福祉法人 川崎聖風福祉会・川崎区)
8月1日(水) 13:30開演
参加人数:利用者約50名、職員13名



昨年に引き続き訪問。知的障害の利用者が多く、大型車椅子の要介護者も数名。昨年から音楽療法を取り入れたプログラムを実施している。普段立ち歩き座っていることが難しい方も、音楽に聞き入る姿が見られる。普段生活空間の中で、生の音楽に触れる機会に、リラックスして楽しんでいる様子、普段より集中している様子、コンサートを聞きたいという意欲、笑顔が見られると職員から報告があった。

●職員アンケートの声:

- 音楽が好きな利用者が多く、プロの演奏を気兼ねなく聞ける機会は少ないため、いつも日常ではあまり見られない聞き入る姿がたくさん見られました。また来てほしいということばがたくさんありました。
- 近くで楽器の演奏を聞けて、利用者が楽しそうだったのでとても良かったと思います。

②通所・生活介護施設 こぶし園(社会福祉法人育桜会・幸区)

8月3日(金) 10:30開演

参加人数:利用者約30名、職員10名、地域の方15名



重度の知的障害があり、大きい声が常に出る、多動の方が多い。職員の観察では、普段であれば部屋の外に出て行ってしまふところ、縦横無尽に会場内を歩き回りながらも、部屋の中で音楽を楽しみたいという意欲がみられた。ステージエリアまで来て、チェアの椅子に座ってしまうというハプニングもありながら、出演者が柔軟に対応、会場が一体となった温かいコンサートとなった。コンサートが進むにつれ音楽に次第に慣れ、静かな曲では、リラックスした様子も見られた。

●職員アンケートの声:

- あまり大きな音がしたり、激しいリズムの曲だったりするとびっくりしてしまったり、怖がったり、落ち着かなくなったりします。弦楽四重奏は本当にぴったりだなと思いました。またプロのびしっとあった音、調和の取れた音は、聞く人を安定した気持ちにさせてくれるのだと思います。普段音楽を大きめの音でかけると落ち着かなくなる方もしっかり聞いていました。派手でない衣装や落ち着いた雰囲気の演奏者の方の様子もよかったですと思います。ホールでも障害者の方がきける場所があるとよいと思います(声を出したり、動いたりしてもOKのプライオリティシートなど)。
- 曲目がバラエティに富んでおり、また1曲1曲が短めで間延びすることなく、ちょうど良いすばらしい構成であったと思いました。

③障害者福祉サービス事業所 セルピきたかせ
(社会福祉法人 長尾福祉会・幸区)
8月3日(金) 14:30開演
参加人数:利用者約40名、職員6名



比較的若い方が多く、軽度な知的障害の方が製パン、軽作業などに従事している。会場が狭かったがその分距離感が近く、対話をしながらライブ会場のような盛り上がりでコンサートが進んだ。利用者のデザインによるオリジナルTシャツを着用したことも好評。曲の途中、家族を思い出して涙する方の姿も見られた。ほぼ全ての方が10月のオーケストラコンサートへ来場。

●職員アンケートの声:

- 皆さんとても表情良く参加していました。曲に合わせて体をゆらす人や、気持ちよくなりウトウトする人や、「すごい!ステキ!」と興奮ぎみに話してくる人など、それぞれ楽しめたようです。秋のコンサートも楽しみにしているようでした。
- 利用者の皆さんは普段なかなかコンサートなどのLIVEを見に行く機会が無いので、本当にすばらしい会でした。演奏に感動して涙する方も何人かいました。コンサートもとてもアットホームな雰囲気よかったです。みんな終始笑顔でした。音に敏感でなかなか音楽をずっと聴けない方も、最後まで表情良く参加されていました。

④障害者支援施設(通所)もえぎの丘
(社会福祉法人セイワ・中原区)
9月5日(水) 10:30開演
参加人数:利用者35名、職員10名



若い方が多く、軽度～中程度の知的障害の方が多く、元気な方が多い。冒頭近くで演奏を聞いていただいたときから歓声があり、期待が高かったことがうかがえた。グラスノフでもリズムに応じた手拍子が起こり、静かな曲では静けさの中、耳を澄ます姿も見られ、メリハリあるプログラムを楽しんでいる姿が見られた。一部の方が10月のオーケストラコンサートへ来場。

●職員アンケートの声:

- 普段長く座ってられない方々が、皆45分間着席して参加することができ、目をかがやかせて聴き入る様子に、私たち職員皆驚きました。とても楽しかったようで、数時間ニコニコと良い調子が続いた方も多くおられました。その様な驚きや発見は、ご家族の皆さんにもお伝えし、皆さんとても喜んでおられました。
- 利用者がノリノリでにぎやかであったが、とても好意的に受け入れて下さり、楽しい雰囲気最終参加させて頂き、とてもありがとうございました。
- もし場所に余裕があれば、もえぎの丘の利用者さんたちは「参加型」が大好きなので、「この曲は立って自由に踊っていいですよ」「この曲は手拍子で参加して下さい」等のアナウンスがあるとよいかもしれません。

ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～

(開催日時:2018年10月9日 会場:ミュゼ川崎シンフォニーホール)

公益財団法人東京交響楽団 チケット販売本部 佐藤 雄己

本コンサートは、平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業「フランチャイズ・オーケストラによる地域共生社会実現を目指した「音楽パートナーシップ」整備構築事業」として「音楽のバリアフリー」を掲げ開催した本格的なオーケストラコンサートである。

福祉施設(4施設)への「出張ミニコンサート&VR機材によるオーケストラ体験」を組み合わせたアウトリーチ活動(みんなで集えるコンサート ミニ)と連動しながら、障害者を含めた、こどもから高齢者まで、社会を構成する多様な人々が集うコンサートを開催することで社会包摂を体現し、また、共生社会実現への機運を高めることを目的に開催した。

また、昨年度開催の同公演から得られた知見を発展的に活かした「はじめてのコンサートホール体験会」と、文化芸術事業ではあまり顧みられてこなかった「PDCAサイクル」を見えるかたちで実践すべく有識者・公演担当者による「フィードバック座談会」(P11)を新たに実施した。

概要

①本コンサートは「耳の聞こえない人にも、音楽を届ける」というコンセプトから出発したものであるため「聴覚」にハンデのある人でも「触覚」で音楽を楽しんでもらえるように「体感音響システム席」を引き続き導入した。



ボディソニック
(体感音響システム席)
©平銀 平



司会・ナレーター 吉田孝、
手話通訳者
©平銀 平



字幕サービス
©平銀 平

加えて、演奏会中の曲紹介や司会を手話通訳者を介した同時通訳に加え、字幕サービス(captiOnline)も提供するなど、耳が聞こえないことによる障壁ができる限り小さくなるよう配慮した。また、プライオリティ・サポート(車椅子席の拡充・点字プログラムを用意等)を充実させることで、聴覚障害者だけでなく、視覚障害者や身体障害者も来場し易くなるよう心がけた。

〈はじめてのコンサートホール体験会〉

より来場へのハードルが低くなるよう新たな取り組みとして、主に障害者を念頭に、はじめての場所に不安のある方や、事前に鑑賞準備をされたい方のために、会場の説明・案内などを通して、来場への予行練習をしてもらうプレ・プログラム「はじめてのコンサートホール体験会」を用意した。

申込者は想定よりも少なく、全盲の方1名と介助者1名の1組が体験会に参加し本番さながらの入場作法(別途用意したチケットを実際にもぎって入場など)でお迎えした。「触れる舞台模型」を使って自身の席位置を認識してもらった上で、障害者用トイレなど付帯するホール設備も確認してもらいながら、当日座席までご案内し導線の流れを掴んでもらった。

②プロオーケストラによる実演芸術でありながらも、開催趣旨を鑑み、曲目及び演出も吟味した。曲目面では「小室昌広:ディズニーのメロディーによる管弦楽入門」という曲中で楽器紹介が付随する曲目を取り入れ、クラシックにあまり馴染みがなくても親しみやすくなるよう心がけた。一方、演出面では、オーケストラによる演奏だけでなく、日本を代表するヴァイオリニスト



指揮 円光寺雅彦
©平銀 平



ヴァイオリニスト
大谷康子
©平銀 平



ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～

であり川崎市文化大使でもある、大谷康子氏をソリストに起用し、本格的なクラシックコンサートとしても聴きごたえがあるように工夫した。

③開催趣旨の全うと演奏会の円滑な運営のため、関係諸団体との「横断的なネットワーク」(音楽パートナーシップ)を形成すべく、本拠地であるミュージア川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)と共催のかたちをとり、あらゆる面で緊密に連携する一方で、川崎市、川崎市教育委員会、公益財団法人川崎市身体障害者協会、公益財団法人川崎市老人クラブ連合会、社会福祉法人川崎市社会福祉協議会(前回よりも後援団体2団体増加)には、情報伝達や見聞の共有でご支援いただいた。とりわけ、本年度制定された市立の小中高校が休校となる「かわさき家庭と地域の日」に開催できたことで、来場の多かった子どもたちへの共生社会の可視化を通じた相互受容の促進を図る良い一機会となった。また、生活保護受給家庭やひとり親世帯の子ども・家族へ支援を行うNPO(NPO法人(特定非営利活動法人)川崎寺子屋食堂)と協力し、彼らへの芸術鑑賞機会を提供。その団体が実施したアンケート(厚生労働省提出)では9割以上が「親子関係に良い変化があると思う」と答え他の企画参加時よりも高い数値が出たとの報告もあった。

結果

関係諸団体と丁寧に連携を進めたことで、事業の周知広報が多層で広がり、かつマスメディア等を補完的に利用した結果、前回比263%という飛躍的な券売(1384枚)を達成し、会場定員1566席の約9割を販売できた。特に、連動したアウトリーチ活動先が本コンサートへ外出企画として団体で来場するという好循環をつくり上げることができたことは大きな成果である。加えて、アンケート(調査回答者271名:総来場者の約2割)では、本趣旨のコンサートへの積極的なリピート来場意向は8割であり、条件付きでのリピート意向と合わせると99%にもおよび(詳細はP10へ)、券売実績及びアンケートから、本事業への好感が窺える。

なお、充実した音楽体験であるならば文化芸術体験へ対価を支払う気運醸成が欠かせず、持続的に「音楽のバリアフリー」を発展させていくためにも、安易な招待券の配布は控えるよう努めた。



演奏会全体の様子 ©平舘 平

後記 ～さまざまな「人」が交差した場景～

多くの鑑賞サポートを用意しつつ、このコンサートが目指したのは「障害のあるなしにかかわらずに全ての人々が楽しめるオーケストラ・コンサート」であった。結果、車椅子に乗って来場される身体障害者の方、白杖で足元を探りながらホール内を歩く方をはじめ、親子づれや高齢のご夫婦など、文字通り、この社会を構成する「みんな」が集った場となった。

会場に設置した触れる舞台模型や楽器に点字を施したオーケストラ配置模型に、興味を示したのが子どもたちであったことは印象的であった。目の前の「これは何か?」をわざわざ問わずして、自然と受け入れていく。共生社会が超えていかなければならない「心の壁」を彼らはいとも容易く飛び越えていった。彼らの「フラットな」眼差しは、この時この場を共有したさまざまな「人」へも同様に向けられていたのではないだろうか。それが、子どもたちだけでなく、コンサートに集った全ての人の眼差しでもあったと信じている。

“共生社会”と言えばなんだか小難しく聞こえるものの、言わばそれは、各々が「相手にとっては「私」こそが異質である」と自らを認識し、相手を思い慮る心がけが浸透した社会である。それに思い至らせたのは、終演後のフィードバック座談会での上園さんのレセプションニストへの気持ち(P.12)であった。「私が白杖を出していたので、この人、気がついてくれないかな」。言葉にしなくても、お互いの違いを見ながら、相手への自然なコミュニケーションができるようになっていく良い一機会となるコンサートであったことを期待したい。

コンサートホールでの“その場景”



開演前の風景 ©平舘 平



2階ロビーでのパラアート団体「studio FLAT」作品展示 ©平舘 平



触れる舞台模型 ©平舘 平



点字つきオーケストラ配置模型 ©平舘 平



指で触れて点字をたしかめる様子 ©平舘 平



アウトリーチで活用したVRを体験する様子 ©平舘 平



夜盲症用のメガネ型デバイス体験(HOYA株式会社) ©平舘 平

ファンタスティック・オーケストラ ～みんなで集えるコンサート～

【出演】
指揮：円光寺雅彦
ヴァイオリン：大谷康子
司会・ナレーション：吉田 孝

【曲目】
ロッシェニ：歌劇「ウィリアム・テル」序曲より
 スイス軍の行進
小室昌広：ディズニーのメロディーによる管弦楽入門
マスネ：タイスの瞑想曲
サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン
ポロディン：だったん人の踊り

主催：文化庁、公益財団法人東京交響楽団
共催：ミュージア川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)
後援：川崎市、川崎市教育委員会、公益財団法人川崎市身体障害者協会、公益財団法人川崎市老人クラブ連合会、社会福祉法人川崎市社会福祉協議会

◎技術協力：若月大輔(国立大学法人筑波技術大学准教授、字幕サービス「captiOnline」)

●ロビー展示協力：HOYA株式会社、studio FLAT
●公演情報紹介・告知媒体：共同通信、読売新聞、東京新聞TODAY、神奈川新聞、NHK横浜、FMヨコハマ、ラジオ日本等

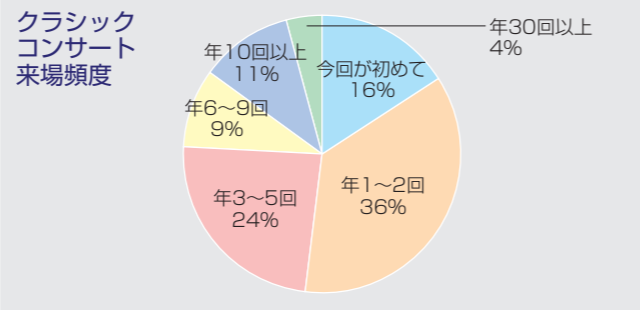
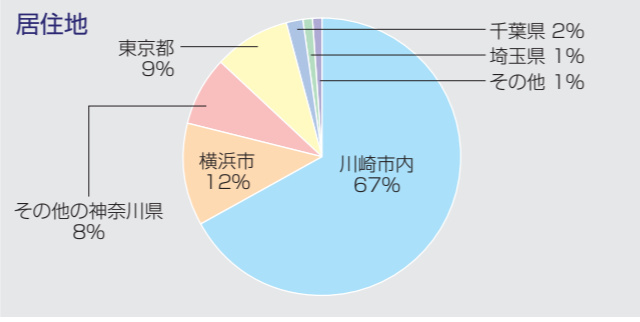
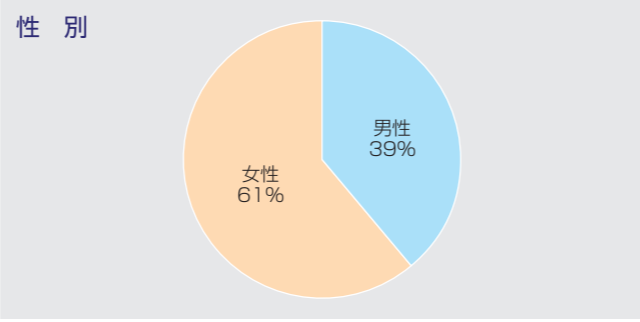
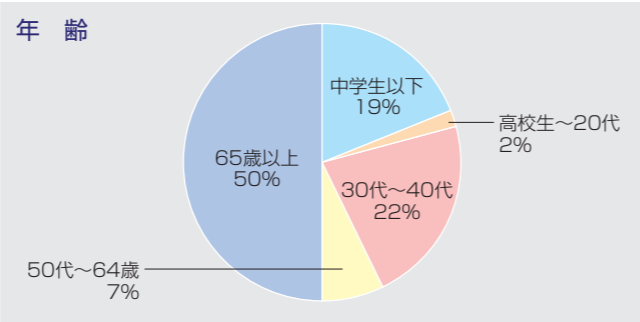
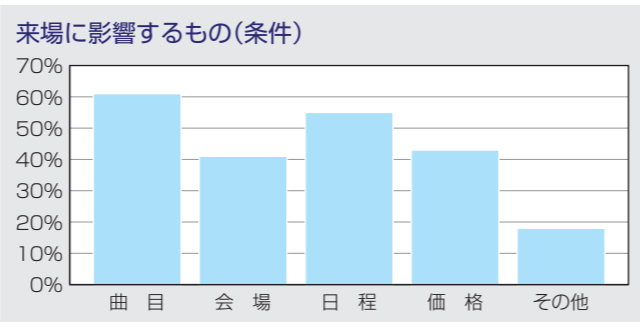
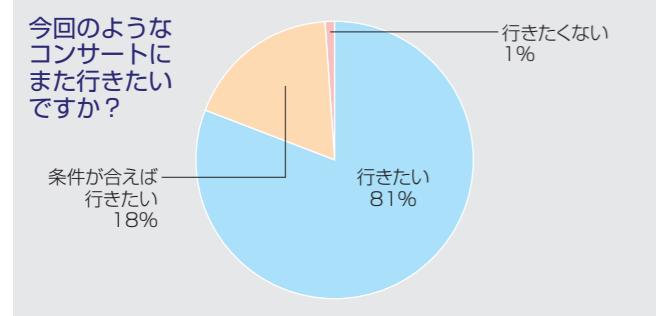
アンケート結果

来場者へのアンケート集計結果(抜粋)

今回来場者へアンケートを実施し、総来場者(1385名)の内271名(約2割)から回答を得た。

全体の満足度を測る項目では、1点～最高5点とした場合の平均点は4.5点であり、本事業趣旨を踏まえたうえでの「今回のようなコンサートへまた行きたいですか」をたずねる項目では「行きたい」「条件があれば行きたい」をあわせると99%がリピート意向を表明しており、演奏会として満足させられるものとなったことがわかった。また、「クラシックのコンサートへの来場頻度」をたずねる項目で「今回がはじめて」と答えた方が16%にのぼり、これは定期演奏会等と比較して高い数値である。上記のリピート意向とあわせて考えると、閉鎖的なイメージの強いクラシックコンサートだが、工夫と伝え次第で、誰もが楽しめるコンテンツであることが見受けられる。以下は自由記入欄に書かれていたコメントと集計データである。

- 大谷康子さんが席の前まで弾きに来ていただけて(普段、音に過敏があり、イヤーマフを着用していますが)ヴァイオリンの音が聞こえて、ニコニコして「聞こえた!」と言っていました。音楽に触れるとはこういうことで、ハンディのある子や人でも感じ取れるなあと思いました。(30代女性)
- また、みにいきたくになりました。目がぴかぴかになりました。しゅわがはやくてびっくりしました。(小学生)
- 今回は初めて家族3人で聞きに来ました。主人がラジオを聞いて(コンサートが)ある事を知りました。～知的障がいの息子には無理かなとは思いましたが、楽しく手をたたき、ディズニーの曲は「知ってる」と言いながら聞いていました。時間もちょうど良く、場所も近くて、電車に乗って楽しみにして来ました。これがいっきかけの一つになり、音楽も好きになってくれればいいなあと思います。ありがとうございました。(30代女性)



フィードバック座談会(演奏会評価を中心に)



実施概要

コンサート終演後に来場者アンケートを利用しながら「フィードバック座談会」を実施し、有識者・関係者それぞれの立場から意見交換をして今回の事業の総括を行った。直後の生の感想や、それぞれの立場からの意見や知見を共有し、行政や音楽ホールをはじめとした、地域福祉施設や団体とのスムーズな連携と協働の必要性を一層感じるものとなった。

10月9日(火) 13:30～15:00
 ミューザ川崎シンフォニーホール 2Fバーコーナー
 参加者:

- 新井 鷗子
 国立大学法人東京藝術大学
 COI拠点「障がいと表現研究」特任教授
- 白井 誠一郎
- 上 蘭 和隆
 認定NPO法人DPI(障害者インターナショナル)日本会議
- 大平 暁
 アーティスト/アートディレクター studio FLAT主宰
- 竹内 淳
- 前島 和樹
 ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)
- 桐原 美砂
- 佐藤 雄己
 公益財団法人東京交響楽団

新井：ファンタスティックオーケストラ、前回と今回と聞かせていただいたんですけど、今回とても幅広い方々が楽しめているというのを、ほんとに目の当たりにできたという感じがしました。例えば手話通訳の位置とか、障害のある方の席とかがすごく工夫されていて、共生社会をテーマにしたコンサートということでは、すごく進化しているなと実感しました。アンケートでご意見のあったナレーションや司会が長いというのは、知的障害の方とかで、やはり何回も同じことを繰り返して説明いただいた方がいいという方もきついていると思いますの

で。まあ、一般の方には長く感じたかもしれないけれども、知的な障害の方にはちょうどいい長さというか、説明として適切な長さだったのかなという気もしました。あと、いろいろな鑑賞サポートについても、それぞれ使いこなされていたのではないかなと思いました。それから、大谷康子さんが、客席の中を楽器を持って演奏しながら歩いたのは、ほんとうに、あ、こういうことですよって思って。

上 蘭：泣いちゃった。
 新井：何か鑑賞サポートよりも何よりも、こういう演奏者がそういう方々に寄り添っていくということが一番大切なんだなということを感じました。

白井：私は初めて参加させていただいて、とても参加しやすかったっていうと、時間が1時間くらいってことで、ずっと長時間座っていることが難しい方々にとっては、ちょうどいい時間だったのかなと思いました。

このパンフレットなんですけれども、点字プログラムを僕は見てなかったので、上 蘭さんにプログラムあるよって言えなかった。会場の入口の所に、こういったものがありますよと、大きい看板なんか置いてあると、そのプログラムも見ない人にとっても、わかるので。とくに僕なんか車いすで移動しているので、やっぱりそういうのを見ながら動けないんですよ。そういう意味では、僕はちょっと、上 蘭さんに悪いことしたなと思いつつ参加しました。あと、ボディソニックを4人ばかり使わせてもらったんですけども、機械の使い方の説明を、今日はパイオニアの方がしてくださったんですけども、そこは手話通訳の人が入って、使い方を含めて説明していただけたらいいのかなと思いました。
 白井：まず手話通訳者が、ナレーターの隣にくださった方はよかったと思うんですけども、席が左端だったので、ちょっと手話が見づらかったっていう意見がありました。車いす席の方は、サイトラインがちゃんと確保されていて、前から見えたんで、それはすごくよかったっていう、感想をもらっています。車いす席に関してですが、2階の方にありましたよね、実はもうちょっといろんな場所から、車いすのまま見られるといいのかなと思いました。

上 蘭：今後の課題ですよ、ホールの。
 白井：野球場で言うと、大リーグだと、外野とか内野とか、いろんな席で車いすのまま見られる席が確保してあって、ここだけってことでなくて、分散するんですよ。なのでそういう意味では、1階の席だとか、いろんな場所に車いす席を置いてもらって、見れるようになると、さらにいいかなと感じました。
 桐原：車いす席は、今日は実は一階の1列目のセンターのところは、普通にチケットとして売ってしまっているんですけども、あそこの席を外すことができるんですよ。
 竹内：外すことはできます。
 桐原：例えば席を外して車いす席を入れるという時に、安全上

台数が制限されることはあるんですか？

竹内：安全上ということだと、ここ今、ホールの1階席が、建物の4階なんですよ。火災になって避難しなければならないときは、避難経路は建物の2階か1階に逃げるんですが、そうすると当然4階から一番近い2階までの避難階段を、一般の歩く方は使うこととなります。消防所の方は、自分たちが車いすの方を案内するから、大丈夫だっておっしゃるんですが、本当にそれでいいのかと。消防が来ますから、待っててくださいってなかなか言いづらい。実は明日避難訓練があるんですが、

上蘭：それは行かなきゃいけないなあ(笑)。明日の避難訓練に障害者はいないんでしょ。

竹内：いないです。ただ障害者役は立てるんですけど。

上蘭：いや「役」は「役」なんですよ。だから当事者がいないと、もう「へ」ですよ。何にもならない。だって障害者だっていろんな障害者がいるでしょう。まあ一番大変なのは車いすの人で、消防の人たちが運ぶといっても、消防の人は障害者のいろんなことを知らない。例えば今、車いすは150キロあって、本人が100キロって言う人もいますよ。でも多分彼等は想定していないと思う。こういう時にね、ぜひ障害者を入れてるのが、一番大事。東日本大震災でもそうですし、熊本地震でも西日本豪雨でも、やっぱり障害者が逃げ遅れて取り残される。そこに障害者がいたってこともわからない。私たちDPI日本会議としては、誰も取り残さないという、これがほんとうの社会だなというふうに考えています。明日来なくちゃ。招かれなくても、帰れて言われても。言わなきゃだめじゃん。

白井：上蘭さん行って下さい。

上蘭：あと、言っているのかな。この座談会がなければ今日は最高の日だったなと思っています(笑)いやいやいや。私は、本当に純粋に、音楽を楽しむために来たつもりで、いろんな障害の方がいらっしゃるというんで、もっといろんな合の手が入るのかなと思っていたのだけれども、あとは大谷さんの音を聞きに来たんですけど、本当に楽しかったです。音楽会は楽しめればいいのかと思う。交響楽団の人たちが事務方も含めて、障害者を一緒にしているというのが、やっぱり変なんですよ。もうそうせざるをえないというのも、わかります。でもこれはもう上蘭のちょっとした意見だと思って、雑談でいいんです



©平舘 平

よね。なので音楽会はほんとに楽しんだし、音もきれいだったし、たぶん午前中に生の音楽を聴くというのは初めてだったし。それで午前中だとさすがに眠くならないということを知りました。

あとは、手話通訳の人もいたけど、手話を知らない聴覚障害者の人もいっぱいいるので、そこはちょっと変だったかなと。あと、ここは駅からかなり近くて、目つぶっても来られるなっていうくらいで、びっくりしました。視覚障害者は一番何が大変かって、建物の中を覚えるのは、非常に難しいんです。覚えていたからといって、当日そこをそのように歩くとは限らないので、その時にもし単独で視覚障害の者が来たら、お手洗いか、先ほどのサイン会か、あとは帰りにもしレストランが開いていたら、レストランまで、そんな程度を案内してくれる方がいるといい。視覚障害者に対してはそれでいいのかなと思います。

桐原：上蘭さん、これ点字プログラムです。

上蘭：あ、そうそう!点字プログラムのこと、わざと黙っていたんです。あるってことは知ってたんですけども、あそこのもぎりの方が、私が白杖だしていたので、この人、気がついてくれないかな、って。いつもへそ曲がり得意地悪な人間なので、やあやあ気がつかないんだなあって思って、そこはちょっとがっかりした。

新井：点字プログラムに関しては、私もホールのレセプションの人が「点字プログラムがあります」と声を出して伝えなかったために、全く無駄になってしまったことがあって。で「声に出して伝えろって言われてなかったから、言わなかった」って言われてしまって、ユニバーサルマナーの教育も必要だなとすごく感じたことがあります。

上蘭：今どうサポートするかが難しいですよ。もう点字読める視覚障害者は多分半分くらいしかいないと思うので、みんな電子データでいいかっていうと、またそれもどうかっていうのもあるんですが。

点字ってとても簡単な文字なんですよ、記号としては。ところが、触って読むのを習得するのが難しいんですよ。今いろんな音声がありますし、パソコンもあたりメールをやったりするんで、自分の名前くらいの点字なら読めるけど、長文を読める人っていうのは、文字が読めないくらい重い視覚障害者の中で半分以下だと思います。視覚障害者の8割か9割の人は、近づけて見える人なんです。だから彼らは、点字よりも、あふれかえっている文字を見た方がいいし、特に今スマホで拡大もできます。そういう意味で、文字を見れない人の、半分が見えないくらい。そんなもんですよ。視覚障害者は全部点字が読めないというのは、その辺の(認識の)違いがありますね。

新井：みんなほんと誤解してますよね。全盲でいらっしゃる方と弱視の方と全く一緒にしてしまって。

上蘭：今日DPIで一緒に来た彼は超弱視の強度難聴なんで



©平舘 平

©平舘 平

す。なので彼は、点字は読めないです。でもこんな感じで、眼を近づけて。でも結局近づけるから視野がないんですよ。なので、視野のない人は、送りが速いとなかなか読めない(※)提供した字幕サービスで文字の送りが速かったという指摘があった)。まあ健常の方に多種類の障害を理解するということは、なかなか難しいな。私も、他の人とか、白井の障害のこと、ほとんどわかっていないんですけども、一緒にたにどれもシニアを理解したり、障害者を理解したり、精神障害を理解したり、やっぱり難しいよな。でも、今のところ一緒に「障害者」とくくるしかないのかなと、難しいよなあって思っていました。でも音楽会は楽しかったし、本当に生の楽しさっていうのを、改めて知らされて、もっと足を運ばなきゃいけないなあと思いました。

竹内：今いろんな話を伺っていて、日々悩んでいるといいますが、障害をもつ方もどんなふうに音楽を聴いていただくかって言うのもホールの中で話し合っているんです。まず最初の1年ぐらいは、いろいろな障害を知ろうと、いろんな方にお話を伺いながら、少しずつできることをやっていこうということで、うちが初めて取り組んだことを東響さんに、逆に東響さんが初めて取り組んだことを聞いてお互い情報交換をしたりと、まだまだ途上にあるというのが一番大きな点です。

車いす席をもっと増やしたいというのも我々の願いですが、一方で避難の問題、それから車いすの方が使えるトイレの数の問題で、市の方にも現状見てもらったりして。実はこのホールって斜めになっているところがすごく多いんですよ。これは音響をよくするために、通路とか、音がすべて4階席まで届くように渦巻き状になっているんです。ということは平らになっている場所が非常に少ないんです。平らな場所には車いす席があるんですが、もう少し増やすとなると、じゃあどこに増やせるのかなっていう。今まだ10席分ということで、法律で定められている割合はクリアしてます、ということなんです。現状それじゃあ合わなくなっている。本当にそこは今悩んでいるところです。

それと、これも今ご指摘いただいて思ったんですが、点字プログラムの存在がですね、きちんと白杖持った方がいらした時に、「点字のプログラムがございますよ」というふうに、今日は確かになんていなかったです。そこが東響さんとホール側の

意思疎通というほど大げさなものじゃないんですけども、共有しとけばよかったんですね。意外にそういうところがおそろかになっちゃったなと思います。

あと、もう一つ、いろいろな障害者を一緒にたにしているという。これは私も今日ずっとホールの人間としてロビーに立っていたんですが、それは思ったんですね。いろいろな方が皆さん一緒にいらしている。もちろん学校から来た小学生もおじいさんもおばあさんも来ている。例えばこれが演劇とかだったら、1週間ぐらいの間午後と夜とか(1日に)2回やってたりとか、例えば視覚障害の方にサービスを手厚くした回を作るとか、そういうことがもしかしたらできるのかもしれないけれども、音楽会って一回しかやらないですよ。

上蘭：あんまり障害を障害と考えないで。障害者たちは、たぶんこういうクラシックの演奏家に触れる機会がないという意味で、障害者をひとくくりにして下さったのは、いいんですよ。でも障害者だからこれだけ手厚く私たちが何かをやるとういうふうに、あまり構えないで、いいのかなと。やっぱりふだん知らないから、障害者は助けてやろう助けてやろうと皆さんが頑張っちゃうわけなんですよ。そうするとね、やっぱり楽しめないでしょう。音楽会なんて音楽が聴ければいいんですよ、そんなもん。車いすの人が車いす用のトイレがないところに行くのは困るかもしれないけど、そんな程度で、必要な時に私が何かお願いしたときに「いや今日はバリアフリー音楽会じゃないからやらないよ」、これが一番嫌で。これがない社会の方がいいんです。だからいろんな障害者を見てそれに慣れてほしいわけ。楽員の人たちも含めて。なので白井が必要なこと、上蘭が必要なこと、聴覚障害者が必要なことがちょっとわかれば、もうちょっと違う演奏会もできる。

だって視覚障害者なんて、お金があって、ちょっと歩ければ、来られるんですよ。トイレも普通のトイレでいいし、でもやっぱり車いすに乗っている人たちは、車いす席があって、車いす用のトイレがあって、近所の駅にエレベーターがないと来られないっていういろんな状況があります。そこをわかってもらえればそれが最高かなと思います。手厚く障害者を扱わないでほしい。今日はこれを言いたくて来ました。

白井：何かをやるうってよりも、障害のある人が、障害がない人と同じような形でコンサートにも来れるそういう環境作ってもらえれば、それで十分なわけで、それ以上何かしてほしいってことではないんですよ。何とか障害だからこうしなきゃ、ではなく、一般の人のように参加できるようにするには、この人の場合はこういう風にすればいいんだっていう考え方のほうがお互い楽になって気がしますよね。

上蘭：私は一応働いているからちゃんと払いたいけど、東京交響楽団の障害者チケット(ハート割引)があるのは歓迎です。歩けない視覚障害者がほとんどなんですよ。そういう人は自分の



©平舘 平

分とガイドヘルパーの分も出さないといけないので、私たちが生の演奏に触れる一つの方法、メリットかなあと思っています。大平：自分は今アートの支援をしていて、スタジオフラットは普段、障害あるなしに関係なく作品の魅力フラットに感じてもらいたいということで、フラットをキーワードに活動しているんですが、去年プロジェクト・マッピングに彼らの絵を使っていたのをご縁に、今年もここで作品を飾らせていただいて、描いた本人たちも今日は全員来られたので、それはよかったなと思っています。

今回のコンサート自体が、そういう障害のあるなしにかかわらず、と書いてあるんで、目安には一つなると思うんですけど、やっぱりこの声が出ちゃったりとかね、ちょっとうろろろしちゃったりってような子が、やっぱりいて、プログラムの注意書きにご理解くださいって書いてあるんですけども、こういうことを書かなくても、当たり前前にコンサートに来れる状況というのが、やっぱりそういう社会になっていかないといけないなと思っています。すごく今日よかったと思うのは、今自分が子ども連れて来てるんですけども、あの子たちがこういうコンサートに来て、ある程度途中で奇声があがったりとかしてましたけど、多少うろろろろすることがあるかもしれないけれども、そういうコンサートを普通に見て育っていったらいいのかなって。

特に自分がやっている分野は障害者アートっていうふうには呼ばれたり、アールブリュットとかアウトサイダーアートとか、特別な名称がどうしてもついてしまうんですね。でも彼らの作品は現代アートとしての価値が立派にあるんで、そういう特別の呼称がないような、**展覧会**とかになっていったらいいなと思っています。そういうことが自然に、当たり前になっていったらいいなとすごく思いましたね。この子もすごく楽しんで見てましたし、聞いていたから、こういう機会がどんどん増えていったらいいかなって。こういう注意書きがいずれなくなっていく社会になっていくと、ほんとにふつうにね、サポートするなんて、仰々しいことじゃなくて、生活の一部って言うくらい、サポートという言葉すらないような、**そんな社会**になっていくといいと、すごく思っています。今日は、重度の子たちも来て、前の方の席で、すごいここにこし

て見てくれたので、それはすごく良かった。最近ずっと調子の悪い利用者さんが何人かいたんですけども、やっぱり音楽を聞いてすごこう、ダウンしていたのが、わりと持ち直してくれてたような感じだったので、それはすごく音楽って力があるんだなと、改めて思いました。

白井：今日ぐらいのサポート内容があるコンサートはもっとあった方がいいなと単純に思っていて、ここだけじゃなくて、いろんなところがあると、普段あまりこういう場に行こうかなって思わなくても、あれば行こうかなって思いますよね。やっぱり障害のある人ってどうしても、自分の生活で精一杯な部分があって、なかなか自分で文化芸術やったりとか、見に行ったりとか、なかなかしづらい環境にずっとあるので、こういうサポートがあるといいなって感じました。そういった場をどんどん使っていくことは大事だと思うので、継続的に、かつもっとたくさんやっていただけるというんな方が来られるのかなと思いました。

前島：我々音楽ホールとしては、東京交響楽団さんとうちと、思いは一緒なんですね。すべての人に楽しい音楽を、そういう場面を増やしていく。東響さんの場合は、こういう大きなコンサートみたいなことから出発していて、今回こういう企画を相談受けた時も、こういう形で第一歩を踏み込むのはいいかな、と。いろんな(障害の)団体とか障害者の人たちと話し合いながら、今があるんですけども。どこの人たちから聞いても、そんなに気にするなと言われます。「楽しい音楽を」ということが根本的にあれば、我々もできないことはできないとはっきり言うので、そこを行きましょう、と。まず第一歩がそこなので、今回の東京交響楽団の大きなコンサートとしてはすごい一歩かなと。これが続くこと、そして改善しながら次の一歩を、ってことが期待することで、一緒にやっていけたらなというふう考えています。

桐原：ミュージアのホールで試みたようなこととか、お互い少しずつ改善できる部分が、これからも増えていった方がいいだろうなと思います。私たちだけでやるコンサートだけではやはり試せない部分もあり、ミュージアムさんでやってきたことが、ほかの事に展開できるのかなど、それがホールとオーケストラと一緒に足並みをそろえてやっていけるという部分で、今回一緒にできたことは、この先へつながっていくんじゃないかなと考え



©平舘 平

ています。情報をどういうふう伝えていくかについても、フランチャイズオーケストラとして、どこまで信頼関係を作っていけるかっていうことと、たぶん同じじゃないかなと思います。実際街の中に出ていってコンサートをやると、その職員の方から生の声が聞けるだとか、そこからつながって別の福祉法人の話が聞けたりするとか、東京交響楽団はこういうことをやっていると安心して伝えていただける相手先が増えていくと思うので、それが地域に根差して取り組んでいく必要のあることなんじゃないかなと



共生社会の実現にむけて越えていかなければならない課題・壁の一番大きなものは、人の心の壁であろう。多様な人々が集まるコンサート鑑賞は、言わば共生社会の可視化と相互受容の機会でもある。座談会でも言及のあった、多様な人々が集うコンサートという場を共有することで、未来を担う子どもたちが社会・人間の多様な姿を自然に受け入れる機会を提供できたことが、文化芸術による「地域共生社会」の実現への大切なプロセスかもしれないと強く感じた。

細かい課題としては、鑑賞サポートの内容についての精査があげられる。字幕サービスに関しては、文字送りや情報保障としての精度を上げる必要性を感じた。また「はじめてのコンサートホール体験会」についても関心の高さに反し、実際の申込が少なく、情報の適切な伝え方に工夫が必要である。既存のサービスを含め、何が求められているか、当事者団体や鑑賞支援を行っている団体とも情報交換をしながら、より良いサービスのありかたを検討していく必要を感じた。

また文化芸術活動に参加できる機会を継続的に創出していくこと、ネットワークを通じてそれらの情報交換が容易にできることなど、持続性のある活動が必要であることは言うまでもない。同事業がオリンピック・パラリンピックの気運に乗じた単発

考えています。

新井：上蘭さんと白井さんの話がよかったです。

上蘭：変なこと言いました?いつも変なこと言うからね。

新井：いや、変なことも含めていろいろ聞けて。

上蘭：でも本当に私は楽しめました。本当にきれいな音だったし。

白井：真っ先に(大谷さんの)本買いに行ったよね。

上蘭：サインももらいましたよ。もらうものは、ちゃんとももらいました(笑)

的なイベントにとどまらず、根の深く広い、真の意味でのネットワークを構築するには、社会的価値の高い持続性のある事業への展開を目指し、行政や拠点ホールとの連携を深める必要性を強く感じている。

同時に、今回の文化芸術による「共生社会」を目指した演奏会開催のノウハウを、クラシック音楽業界、ひいては文化芸術団体に波及させることで、文化芸術団体の新たな社会的価値を高めていく意義も再認識した。

6月に施行された「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」で謳われている「障害者とともに文化芸術を創造する」姿勢を大事にした事業になるよう努め、地域での共生社会実現を目指した「音楽パートナーシップ」の整備構築を更に進展させていく。

【案:東京交響楽団×東京藝術大学COI拠点×ろう学校生徒による演奏会の開催】

(3回目のファンタスティック・オーケストラ～みんなで集えるコンサート～では、ろう者でも音を把握することができる東京藝術大学開発の機材を用いて、ろう学校の生徒に演奏指導をし、プロオーケストラとコンサートを共創する)



TOKYO SYMPHONY ORCHESTRA

Jonathan Nott, *Music Director*

本冊子へのご意見、ご質問等は下記までご連絡ください。

東京交響楽団〈川崎オフィス〉

〒212-8554 神奈川県川崎市幸区大宮町1310 ミューザ川崎セントラルタワー5階
TEL:044-520-1518 FAX:044-543-1488



文化庁平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業

**フランチャイズ・オーケストラによる地域共生社会実現を目指した
「音楽パートナーシップ」整備構築事業 報告**

2018年12月発行

発行／公益財団法人 東京交響楽団 〒169-0073 東京都新宿区百人町2-23-5

禁無断転載・複製